



TITLE:

特別講演 善隣訳書館と岡本韋庵

AUTHOR(S):

狭間, 直樹

CITATION:

狭間, 直樹. 特別講演 善隣訳書館と岡本韋庵. 三島中洲研究 2006, 1: 1-21

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122562>

RIGHT:

© 2006 二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

特別講演

《三島中洲研究》No.1

善隣訳書館と岡本韋庵

2006.3.31

＝松澤舎大塚

狭間 直樹

21世紀 COE プログラム

今ご紹介にあずかりました狭間です。中村(義)先生のほうから過分の紹介をいただきました。ふつう過分といって初めにそう言うものですが、これは本当に恐縮の極みでありまして、中村先生の遙か後輩で、ずっと先生方に教えられながら育ってきたわけですから、“寺から里へ”という言葉がありますように、今日はまさに初めからそういうことで、たいへんに話しにくいことになってしまいましたが、せっかくの機会でございますので与えられた時間で、「善隣訳書館と岡本韋庵」という話をさせていただきます。

この会で話すようにということを言われました時に、できるだけ自分が考えていることを話すのが義務だとは思ってはいるのですが、しかしいただいた三島中洲研究会の会報などを見てますと、たいへんに深く三島中洲の研究をみなさん進めておられる。そういうところに、日本漢学について殆ど勉強していないものが、しかも、世界的拠点を作る COE の場で話をするというのは正直言ってちょっと荷が重いと思いました。

しかし、たまたま岡本韋庵のことについては少し研究というか、触れるところがありましたから、それを紹介することによって、三島との接点というようにところが出てきたら、それとあわせて日本漢学なり、或いは日本での中国研究、或いはそういうことの長い歴史を加えての知識について考察を加えることが出来るかと思って、それ

で「善隣訳書館と岡本韋庵」というような題で引き受けさせていただきました。

皆さんのお手元には3種類のプリントが行っていると思います。一つは私が作りました A4 裏表の、今日のいわゆるレジメに当たるものであります。それから A3 の比較的たくさん枚数のあるもの、種類としては6種類の資料が入っているんですが、一番上に A、B がありまして、一番最後が E と F、2枚目が C でありまして、3枚目以降4頁2枚分が D であります。三番目にいま司会の町さんからも言っていたいた韋庵の年譜。これをどんなふうな略年譜を作ろうかと思っているところに、中村先生が丁寧にこの年譜でも附けましょうかと言ってくださいました。ついありがたくハイといったようなしだいで、そのお話に乗せていただきました。ですから少し長いものになっていますが、参照するところはまた話の中で言いたいと思います。これ(『アジアへのまなざし岡本韋庵』所収)ちょっと間違いがあるあるんですけども、本の中に正誤表が入っていたと思いますから直しておいてください。ここでは正誤は言いません。

では話をさせていただきます。善隣訳書館という名前については、おそらく皆さんよほどでないでご存じないかと思います。非常に小さなというか、一時期存在しただけの、出版業を志し挫折した本屋と言っていいと思いますが、しかし出て来る過程が

よくわかるということで珍しいものであります。なんでこんな所に行き着いたかということから話をいたしますと、いま中村先生から紹介いただきました梁啓超を研究しております、梁啓超を研究するにあたって、やはり日本で彼が多く知識を吸収しているということを少し具体的にトレースせんといかん、というのが我々の主要な視点でございました。そういうところからいくつかの発見を致しましたけれども、なかで善隣訳書館というものにある時、行き着いたわけです。どういう事かと申しますと、梁啓超が日本に来て最初に出した雑誌は『清議報』というものであります。1898年の10月に梁啓超が日本に亡命してきます。政変の後ですね。初めは彼は日本国内で主として政治畑、或いはジャーナリスト・新聞界に働きかけて光緒帝の救出運動をやるんですが、それがうまくいかず、より世論を喚起しようということで雑誌を始めた。

『清議報』は1898年12月の暮れが創刊でありますけども、恐らく当初彼が一番載せたかったのは「戊戌政変記」という、戊戌維新とその後の西太后のクーデター、その後の光緒帝救出運動の必要、これを伝えるそういう文章を中心にしたかったと思うんです。

ところが、その戊戌政変記はNo.10でもって終わってしまいます。それは中断して後に単行本にしてしまうんですが、それは描きまして、10号で終わるということは実はそこで『清議報』の編輯方針に大変化がおこった。それはどういうことかという、光緒帝の救出運動ということも大事だけでも、それよりも清国の国民の覚醒というか、民衆の国民的な自覚、国民への形成、それ

が大事なんだということに彼はどうも気がついたらしい。そのために『清議報』に「政治学譚」という欄をこれから設けると。そこでやるのは西洋の新しい政治学などの、そういう紹介なんだということを銘うってやる。

そこへ出てくるものが、実は「国家論」というものでありまして、それは德国（ドイツ）のブルンチュリという人のものの翻訳だということになっているわけですね。11号から31号まで、ちょっと抜けているところがありますが連載されます。ブルンチュリは日本の事典でもすぐ出てくるんですが、この「国家論」というものが梁啓超自身がどこから採ってきたのか分からなかったんですが、それが実は吾妻兵治（あづまへいじ）という人の漢訳からとっているということが分かりました。この漢訳自体は平田東助なんかがやった日訳、それからの翻訳なんです。それを知っている人はあったようなんですが、最初に我々に教えてくれたのはフランス人のバスチドさんという方でした。その人の話は措いておきます（『近代史研究』No.100の巴斯蒂論文を参照してください）。吾妻兵治の孫訳、つまりブルンチュリのものを日本人が訳し、日本人が訳したものを吾妻兵治が漢訳した、そういう孫訳によって梁啓超は『清議報』に「国家論」という文章を載せているわけです。

吾妻兵治という人は普通の事典では出てきませんし、どんな人か初めは分からなかったんですが、この本が一体どんなものであるかということも、最初我々は全く分からなかった。最初にいくらかこれについて知識を得たのは、今日のプリントの資料Aに挙げました内藤湖南の『燕山楚水』とい

う本であります。そこには善隣訳書館というものがあってそこには吾妻某氏・岡本監輔という者が善隣訳書館を作っていると出てきます。監輔は「かんすけ」でもいいようですが、地元の人には「けんすけ」が正しいとおっしゃるので、僕は「けんすけ」と呼ぶようにしています。

この『燕山楚水』のこの文章というのは、実は内藤湖南が 1899 年の秋に清国を訪問したときの旅行記であって、とりわけ役に立つのが、各地で名士に会った、その名士との筆談を採録してくれている。ということは、99 年の何月何日に誰が何を喋ったかということが、日まで含めて分かるわけですね。この場合は日付を書きませんでした、明らかにしておきますと 10 月 4 日です。内藤湖南が天津で、ここでは蔣国亮の名前だけ挙げておきましたが、もう一人陳錦濤と言う人と一緒に会っている。陳錦濤は南京臨時政府の財政総長になるひとですから、当時の進歩派であります。実際の話はそういう方向で進んでいます。そこで特に関係するのは、蔣国亮という人が中国の改革革新のためには日本の本が大事だ。日本の経験の総括と、日本人が西洋の新しい学問をどう取り入れたか、その本が要る。そのためには、日本人が当時日本訳したもの、漢訳で大事な兆民の『民約論』のようなものもありますけども、普通は日本訳でありますから、中国人が読むためにそれを漢訳してほしいということを言っている。具体的には那珂通世の『支那通史』、我々も学生の頃には少しは読んだものであります。それに『万国史記』という、我々の全く知らないもの、そういう風なものがたいへんに役に立つ。ですから、もっと色々な日本訳さ

れたもの、或いは日本文の書物を、漢訳して我々に提供してほしい、というようなことを中国人の方から申し出がある。それに対して、いやもう既に吾妻某氏と岡本監輔が、善隣訳書館というものを作って、そういうものをちゃんと計画しておるぞという話をしているわけですね。それで後は適当に読んでいただくとして、要するに版權の問題だ何だいろんなことはあるけども、そんなことはなんとかなる、とにかく出してほしい。清国の側さえまともにちゃんと対応できたら、日本側は充分それにこたえる用意はあるんだというようなことを、このところは示しているわけですね（『内藤湖南全集』第 2 巻、60 頁）。

実際に善隣訳書館はできます。それを作る原動力になるのは岡本監輔であります。この段の終わりまで出しておいたのですが、最後に福沢諭吉のことを 3 人で議論しているのですが、これは最後の所ですが「煩をおそれてこれを略す」とあり、99 年に内藤湖南と清国の進歩派が福沢諭吉をどう議論しているのか、残ってくれていたらいへんにおもしろいと思いますが、おそらく湖南はあまり必要ないと思ったから略したんでしょうね。非常に残念であります。とにかく善隣訳書館というものがこんなかたちで、当時、日本の知識人と中国の文化人の間で話題になっておる、ということが分かった。

しかし、そこまでは分かってもそれ以上は全然、何がどんなものであるか分からなかったんですが、たまたま岡本監輔の関連資料が徳島県の県立図書館に寄託されているということがわかりました。目録ができていたというので、その目録を送ってもら

ってみたら A4 版で 40 頁くらいの相当の目録です。多くは文書です。その中に善隣訳書館云々というこの 5 字の入った文書があったんです。これはおそらくそれに違いないと思って、実はその文書が資料 D に挙げた「株式会社善隣訳書館」、その下の「目論見書」等の 4 行は章名みたいなものです。善隣訳書館そのものの紹介のパンフレットです。それで同館に行ってみたら、明らかに僕が探していた善隣訳書館であるということがわかりました。何でかという、ここで出しているものはまさに吾妻兵治の『国家論』でした。ということで、岡本監輔というひとについて少し調べんといかんということで、決して日本漢学の方から進んで行ったのではなく、中国近代史との関係で関わりを持ってしまったという、その程度の僕の勉強の仕方であります。

調べてみますと岡本監輔という人は、辞書のみならず、昔の編纂ものの伝記集みたいなものにも、例えば『続対支回顧録』等を含めて相当の伝記が残っています。ですから吾妻兵治に比べると遥かに有名人であったということが分かります。しかし大抵のものはみな樺太探検の功労者ということが主であって、活字として残っているものの中には善隣訳書館に触れてあるものはないといってもいい。内藤湖南自身、いろいろ交流があったようで、岡本が亡くなった後に墓表を書いているんですが、それは漢文で二百数十字の短いものです。その二百数十字の中には善隣訳書館について一字も触れていません。短いから仕方がない、というか圧倒的に岡本と言えば樺太探検家、あるいはその次には教育家としてという

ころであって、出版者あるいはそれを構想したという方面は非常にウエイトの軽いものとして理解されていたと言っていると思います。樺太についてはもう触れませんが、彼は樺太の北端にまで行ったということでは日本人で最初、土地の人を除いたら世界で最初、間宮林蔵は海峡は発見しても北の端まで行かなかったそうです。それは余談であります。樺太の事については彼はたいへんに力を入れます。のちに樺太がどうにもならないということで千島にちょっと手を出しますけども、これは殆どうまく行かなかったようですね。しかし樺太との関係で千島のことは普通に触れてあります。

岡本自身はどういう人であるかという、幕末 1839 年の生まれで、日露戦争の始まった年 1904 年に亡くなります。阿波徳島県の三谷村というところの農家の生まれであって、生まれた家にも阿波学会の小林（勝美）先生に連れて行っていただきましたが、決して豊かではない家です。家も部屋が 4 つぐらいのものであってですね。もちろん彼の履歴書には平民ということが明記してあります。ただし農家といっても貧農とかそんなことではなくて、おじいさんやお父さんは村の中では世話役的な地位にあった。そういうおじいさんには少し才覚があって、すこしはお金持ちにもなったようです。しかし彼が子供の頃にはもうまた貧しかったようですが。ですから、貧しい農家に生まれながら、何かやはり自分なりにこの幕末の中で新たに身を起そうということで樺太探検に身を投じたということが出来ます。実際に明治政府の初めには箱館裁判所の権判事（ごんのはんじ）というものになるわけですから、これは相当に位が高い。とこ

ろがすぐに日本がロシアとの関係で樺太を
抛棄しました。その結果として彼は職を失
う。その後大体うまくいかないんですね。

あとはお手元の韋庵の年譜を見ていただ
いたらわかると思いますが、基本的にいろ
んな学校の先生を何年かずつやっています。
東京大学予備門にも関係しますが、おそら
くいちばん教育畑で力を入れたというか花
を咲かせたと思うのは、徳島中学の校長に
なりました。当時としては徳島の最高学府
でありますから、そこの校長さんというの
はたいへんに偉かったと思いますし、実際
にいま町さんの方から紹介していただいた
『アジアへのまなざし 岡本韋庵』という
本を作ったのは徳島の阿波学会という学会
でありまして、阿波学会というのは珍しく
自然科学・人文科学・社会科学、徳島県に
あるいわゆる学会数十を連合した学会であ
りまして、その 50 周年に岡本韋庵の顕彰運
動をやろうとやって実際にやられたわけで
すから、徳島県における地位はかつての徳
島中学の校長先生というような、県のトップ
としての文化人という位置づけが今でも
なされているかと思います。ただし、いち
いち触れる暇はありませんので見ていただ
きたいですが、長いところでも 3 年ぐらい
しか教職に就いておらず、つぎつぎと移る。
それもつながって移るというものではあり
ませんから、何かそこに居れなくなる事情、
或いは変わらなければならない事情が起こ
るんだと思いますが、そこまでは僕には分
かりません。

そういう教育者としての面があって、最
後に台北、台湾に行くんですが、台湾から
帰ってきた後、善隣訳書館を構想します。
教育者であるのとあわせてたいへんな著作

家であります。これはおそらく若い頃に充
分に訓練をしたため、すいすいと文章が書
けるんだと思うんですが、いろんな事をす
ぐに漢文でメモしてしまうようですね。そ
ういうものが図書館の中にはたくさん残っ
ていますけども、刊行された本だけでも有
馬（卓也）先生というこの方面の一番よく
調べておられる方によれば、1867 年です
から慶応 3 年の『北蝦夷新誌』に始まって晩
年まで 39 種、等身の著作とっていいくら
いあると思います。多くは日本国内で、日
本のものとして出されます。北蝦夷つまり
樺太関係のものがかなりを占めます。

しかし我々中国史の研究者として大事な
のは、内藤湖南の『燕山楚水』にも出てき
ました『万国史記』というものであります。

『万国史記』とならんで、それは 1879 年 -
明治 12 年の刊行物なんですが、もう一つ似
たようなもの、レジメの下から三分の一く
らいのところにある『万国通典』というも
の、これらはいずれも中国の名著の名前を
採ってきて「万国」を附けたわけで、中国
のものというよりは世界の『史記』であり、
世界の『通典』だということを唱っている
わけですが、これが岡本の著作としてこの
時期に出されている。そして中身は、当時
として言えばやはり一種の世界史である。
それも地図を附けて、当時としてなら一番
丁寧なといってもいいのではないかと思い
ます。全部を比べたわけではないからあま
り偉そうなことは言えませんが。

しかし、これが漢文で出されたために、
日本でよりも中国・清国に持ち込まれてた
いへんに受けたい。そのことについては
後に触れますけども、ある推測によれば

海賊版 30 万部は出たであろうというんですからたいへんな数であります。30 万という数字は少々オーバーであつてもたいへんに流行したことは間違いありません。

その世界史の本の位置付けられ方、当時の文化界における位置を示すのは、序文や跋文の撰者にどういう人があるかということですが、『万国史記』の方は巻頭に何如璋の題字があります。何如璋は初代の駐日公使でありますから、清国を代表する人物に題字を書いてもらった。その題字は一応皆さんにお見せします。カラーで撮ったからこういう風なかたちになっていますが、というのは『万国史記』というのはこんな表紙と封面を持っておって、『万国史記』も『万国通典』も赤い封面なんですね。ひょっとして四庫全書の史部の色をとったのかなというふうに思いますが、そこまで考えておったのかどうか知りません。何如璋の題字は「経国之大業、不朽之盛事」ですから、常套の句ではあるものの最大級の褒辞であるといつていいと思います。ちょっと回します。何如璋に始まり、その次には副島種臣が出てきます。後は文化人になります。副島は文化人ではないかということそうではない、文化人に入れてもいいんですけど政治家としての方が大事でしょうから。というのは、中国で出された海賊版には何如璋の題字はないんですが一たくんは見えてません、僕が見たのは 3 種類しかないんですけども一あと日本人の序跋が出てくるんですが、日本で出されたものは副島はトップですね。ところが清国で出されたものでは副島は最後に回されています。ですから向こうで言えば重野成斎をはじめ、この手の学者の方が偉いと踏んだように見

えます。重野安繹から中村正直・岡千仞、ここでは彼らの署名どおりに書きました。括弧の中の生卒と出身地に関しては僕が補ったもので、本文にあるわけではありません。鳥尾小弥太・甕江川田剛・篁村島田重礼ときます。スラッシュからあとが跋文です。ですから初めの何如璋から 5 人が序文であります。

中身の事は措いておいて、先に『万国通典』の方にまいりますと、その 5 年後の刊行であります、そこでの序跋の撰者は湖山小野愿・甕谷岡松辰、それから東京大学教授と肩書きまである南摩綱紀、それから中洲学人三島毅、ここで三島が出てくるのでちょっと話になるかなと思うんですが、あまり詳しいことは分かりません。鳥尾得庵、これは小弥太と書いてないので補っておきました。その次のなんと読むのか（護美）、モリヨシなのかゴビなのか僕は全くこの人は知らんで、調べても出てこなかった。誰かこちらの方ならご存じだと思ってクエスチョンマークをつけときました。後でお教えいただきたいと思います。藤野啓・省軒亀谷行。友人有井進斎ですが、これは子供の頃からの、そう名乗っているのでしょうか。いずれにしてもこれら三島をはじめですね、幕臣であるか外様であるか別として全部詩文の人ですね。ですからそういうことでいうと、岡本は少し低いところから出発して、そしていろんな活動をしている。おそらくこの序文を書いているような人々が当時の日本の文化界の中核部分である。そしてかれらは首都におり、いろんな意味で高くもあれば中心的存在である。それに対しておそらく岡本は出身もそうですし、身分的にもそうですが、そういう人からみ

たら外周部分、或いは一段低いようなところで活躍しておって、その接点に序文を書いてもらう人たちがあったのではないかと思います。手紙をもっと調べたら出てくるんかも分かりませんが、今の私が読むようなものの中では、それほど深くこれらの人々と交流の跡をたどることは出来ません。

それで三島中洲に関してはですね、今日配った資料のB(20ページ図版参照)に『万国通典』の序、おそらくこちらの方でこういうものは集めておられるかもわかりませんが、『万国通典』の刻本の文章としてなら皆さんに配っても意味があるではないかと思って「山田爽書」の「序」をあげておきました。中身は、おそらく三島中洲くらいの人なら、『万国通典』そのものの内容を精読しなくても、書名からでも書けるという感じがいたします。しかし堂々たる漢文であるということはよく分かる、僕らにもそういう風な印象が与えられます。要するに、「史記」を書いた岡本が今度「通考」を書く。それは司馬遷の『史記』をもってくるのではなくて『通鑑』をもってきますが、要するに歴史の本と制度史のアンソロジーと言ったらおかしいが、百科事典のはしりみたいなもんですが、そういう『通考』と並べてですね、歴史の方はいろいろあるけどもこちらの『通考』に類するものは一切なかったんだから、これを力のある岡本君がやったというのはたいへんに結構で、これから大いに読まれるであろう、というようなことを書いてくれています。ほかの人のものも基本的に『史記』に対して『通考』が持つ意味ということで序文をかいていますから、当時の人々の思考構造からしたら、縦の歴史としての『史記』ないし『通

鑑』というものと、それから横の構造・仕組みとしての『通考』『通典』の類と、縦横の組合せで考える、そのなかにこれを位置づけて書いているというふうに思います。

横に凡例をちょっと附けたのは、横は余ってるのはもったいないと言うか、『万国通典』も普通にある本ではありませんから、ちょっと見ようと思うと面倒でしょうから、せめて凡例ぐらいは載せておこうと思っただけであります。日本で出されているものですから、ここにもありますようにちゃんと返り点が附いています。場合によってはフリガナ振ってあるところもありますが、今ここでは省略します。一つだけ回しておきますと、『万国史記』の方の初めの部分を出しておきました。一枚だけ持ってきました。当時漢文で書くときに一番困るのは、いわゆる今我々の片仮名書きに当たる外国の固有名詞等がたいへん困るわけで、日本人が漢文を作る時でも全部漢字を使いますから、日本の読者のためにちゃんと横に片仮名のフリガナを振ってくれている。もちろん中国で出された海賊版は返り点・送り仮名・フリガナは全部削除してあります。

そういうことで、この『万国通典』の段階で岡本韋庵と三島中洲が、序を求め、あるいは求められた序に相応ずるという関係があるということが分かります。しかし、おそらく社会的地位としてなら岡本は一段低いところで頼んでおったと思われます。

『通典』の方に関してもうすこし分かるといいんですが、こちらはそれほど流行らなかったか、われわれが見てるような資料ではすぐには出てきません。ですから『万国史記』、よく流行った方でどんな風に書かれているか、いくらか書いておきました。中

国側の反応ですね。

王韜が明治 12 年に日本にやってきますが、そのときに『扶桑遊記』というものを出版します。その 6 月 21 日の序にはこの『万国史記』を岡本から贈られてですね、「必伝之巨製、不朽之盛業」であるという、何如璋の題字に近いようなことを、これもまた最大級の褒め言葉であると言っていいと思いますが、そういう風なことを書付けています。それは出た時の話であって、それから十数年の後にですね、康有為が広東で弟子の教育のために色々な教育施設を作りましたが、その中で読書のための手引き書『日本書目志』を作る。そのなかでは日本で出た本はあまり多くないのですが、そのなかにはちゃんと『万国史記』はあがっています。で、松陰の『幽囚録』、これは絶えず康有為があげるものですから、それと合せてあるぞということ、それも「志を図る」(図志門)というところであげられているということをちょっと注記しておきました。梁啓超がそのあと、康有為の門下ではありますが、代貸的に自分の方でもあちこち出張授業を行いますが、そのための手引き書として『読書分月課程』というものが残されています、その中にも『万国史記』は入れられているし、それから横浜大同学校—徐勤が校長になる—そこでも教材にちゃんとこれがあがっている。ということで、もう大同学校ともなれば出てから 20 年、それでもまだ大いに意味があるものとされている。さらに後の、これは 20 世紀になりますが、1906 年に韓国の玄采という人が『万国史記』を書いております。これは実は岡本のものを下敷きにして、増補版みたいなものですが、韓国にも影響を与えていると

ということが分かります。おそらく丁寧に調べたら『万国通典』についても若干のことは分かると思うんですが、今の私には上の『万国史記』に対応するような情報は得られておりません。

そこで三島に話を戻しますが、三島が『万国通典』に序文を執筆した時にはですね、他にも接触するチャンスがあったはずだと思われるのは、1884 年に岡本は亜細亜協会に入会しているんですけども、三島の方は既に入会している。これは中村先生のここを出された中洲の論集(戸川芳郎編『三島中洲の学芸とその生涯』)所収の文章に出ておりますが、中洲は 1881 年に亜細亜協会に入会しているわけですから、その後身である亜細亜協会に韋庵が入った時に、この会を通じても顔を合わす機会があったのではないかと思いますけど、それについては今のところ私は知りません。

いよいよ善隣訳書館に行くわけですけども、善隣訳書館というものができに当たっては、その前史があります。先ず善隣訳書館について先に話しますが、時間的にあまり余裕がなさそうですから、ここは興味のある方はお読みいただけたらと思います。

このパンフレットがいつできたかというのははっきりしません。おそらくいろんな事から推測するに 1901 年の前半であろうと思います。内藤湖南は 1899 年の秋にそういう話をしているわけですね、吾妻や岡本が善隣訳書館というものを立ち上げておるぞという。パンフレットがつけられたのは 1901 年であって、パンフレットは実は既に立ち上がった善隣訳書館を株式会社に転身させる、そのための宣伝用のパンフレット

なのですが、では株式会社以前のことはどうであったかというわけですが、株式会社に何でするかということは措いて、彼らはこの株式会社にする前にすでに少なくとも99年の暮れに本を4冊出しているわけです。そこにあげましたのは『大日本維新史』と『国家学』、それに『戦法学』。いま見つけておるのは3つしかないんですけども、3つとも奥付も皆同じ。ですから非常に計画的にこの3つの本が出されたことが分かります。いずれも明治32年の12月5日印刷、12月13日発行、印刷発行とも同じ日であります。もう1冊の本、『警察新法』、それはまだ見つかっていませんけども、同じく12月5日印刷・12月13日発行という同形態で出されているに違いないと思います。

その著作者は本によって違いますが、例えば『国家学』なら吾妻兵治が著作者、発行者は善隣訳書館、一国光社とも書かれています。今大事なのは善隣訳書館なのでここでは触れませんが、その代表者として松本正純の名前が挙がっています。印刷者は河本亀之助、これは皆同じであります。国光社のところが変わっているものがありますが、それは触れませんが、善隣訳書館に限定して話をいたします。「圀家学」(封面)で、日本人は誰でも知っている水戸光圀の「圀」、これ則天文字なんですけども、何で使ったのかわかりません。題字もみな石埭居士(セキタイコジ)、当時の永坂周という有名な書家。ですから非常に計画的に作っていることが分かります。ただ一つちがうのは『戦法学』だけ巻頭に大きな題字があるんですけども、大山巖元帥であります。これだけは、「大日本善隣訳書館版」の方印、普通は題字の裏に捺してるのに、この大山

元帥の後に押してあるから相当敬意を表してこれを掲げたことが分かります。というのはこの『戦法学』の著者だけは軍人で、大尉です。善隣訳書館が出した本、この後、清国へ宣伝のために持って行ったというのは、今ここに回す3つの本およびここには集められていない『警察新法』というものであります。ここでやっぱり問題になっておるのは、内藤湖南の対話でも出てきた版權法の問題であります。それはちゃんと官吏を通じて禁止令を出したらことは済んだということで、ケリがついたということになっています。

一番大事なのはこの時期のことを考える上で、中国のことだから日本の本なんかは売れるはずなからという意見を持つ人がある。しかし向こうへ行ってみたら、というのはここに出てくる、「戦役(日清戦争)の結果、彼れ大に吾国に信頼するの念を起す」、日本の本をどんどん受け入れる準備ができておると。精神的には中華意識なんかは払拭された、あるいは日本のものを受け入れるということでは向こうの方が求めている。ちょうど、蔣国亮が言っていることと同じようなことを、一蔣国亮には会っていないようですけども一、吾妻兵治と松本正純という二人の善隣訳書館の幹事が向こうで実感してきた。ですから、これうまくやれば大いに自分たちの事業は成功する、大阪商船の長江航路云々というような事例が4つあがっていますけども、あれらが国家の援助の下に出発して、その結果今ではちゃんと営利的にも成功するようになったのではないか、ということを行っています。

実は善隣訳書館にもちゃんと国家の援助が出ています。それは、吾妻兵治の「行略」(宮内黙蔵『吾妻醒軒行略』)にはっきりと「外務省の機密費 2000 円」と書いてある。ですから何も隠さねばならないと思っていない。それを言ったら宮崎滔天なんかも機密費ばっかしで活動しているようなものですから。それはともかくとして、ですから国家的な支援の下に自分たちは出発する。だからと言って、日本の国家の大陸侵略の尖兵なんていうような意識は全くない。むしろ自分たちは清国の人々の求めるものを提供しに行く。しかもそれは国家的支援の下にやるんだが、我々のことは必ずうまく成功し、初め国家的に出発したものがわれわれ個々の営利という点でも成功する。そういうものとして我々は進むんだということを言っている。

では、なんで偉そうにそう言えるかというと、自分たちの提供する知識というものは向こうで要るものなんだ、日本の経験を提供することによる隣国支援、我々の新書一というのはいわゆる本のスタイルではなくて一、新しい知識を詰め込んだ書物ということで、清国の知識を求める人々の見識を引き上げる、そういうことでやっていく。日本も明治維新の時はどこかのまねをしようかということで、イギリスの真似をしようという時はイギリスの本がよく売れた、フランスの時はフランスだというようなことですね。いまや清国は日本をモデルにしようとしているんだから、向こうでこちらのものが受けるのは間違いなしだ、ということで彼らは考えています。

しかし実はこのパンフレットが出た後、善隣訳書館そのものは潰れています。その

一番の理由は、彼らが清国へ送った本が、どうも義和団との関係で焼けてしまったらしいんですね。また、士族の商法的なところもあったにちがいありません。僕自身は営業的に本を作ったことはないので、原価と定価の関係その他はよく分かりません。しかし、ここに書かれている計算を読む限り、これはおそらく失敗するのではないかと、我々でも思えそうな計算をしております。計画通りいったら配当金は年 13%出るようですからなかなかのものです。実際に内藤湖南も書いているように清国側に需要があった。このパンフレットを見ていただいたら分かりますが、いちばん善隣訳書館側に頼りになる情報を与えておるのは文廷式、当時としては超一級の文化人ですね、しかも進歩派の。ですから、そういう意味において大いに自信をもって出発した、にもかかわらず失敗したということで、その失敗を岡本との関係で触れておきたいと思っています。

実は善隣訳書館というものは、岡本韋庵の文書の中に少なくともそこに行き着くまでに 3 つの前段階の文書が残っています。最初は東洋開国商社というものを構想しています。それが善隣義会というものになって、それから善隣協会になって、その後、善隣訳書館が登場するということになります。全部手書きの文書があるんですが、それはどんなものであるかということを見ていただくために資料集(拙編『善隣協会・善隣訳書館関係資料—岡本韋庵先生文書』東方学資料叢刊第十冊)を回しております。読むほどの時間はないでしょうが、こんなかたちで残っているんだということを見ておいてください。そもそも東洋開国商社と

いうのからして、いわゆる上のパンフレットに営利的ということとはっきり対応している。初めから単に文化事業をするというよりも、やはり苦勞して学校でも2、3年勤めてはまた失職というようなことを繰り返した人ですから、生活の糧を出版によって得ようと考えたに違いない。はじめの「開国商社」の文書はたった1つしかありません。善隣義会となるとかなりはっきりしてきて、協会、訳書館と段々に出版に特化されます、しかも出版が訳書に特化されます。訳書といいましたが、重野成斎の『大日本維新史』、あれは書き下ろしです。ですから必ずしもいわゆる我々が考える翻訳というものではないんですけども、しかし彼らの意識としたらあれも日本語で書かれるべきもののはずで、重野は初めから漢文で書いたと思いますが、それを漢訳として出す、その意味での訳書であろうと思われます。ですから販売先は初めから清国というふう

に想定されている。その中でですね、善隣義会の五規というものがあるのですが、それに三島が登場します。それが資料C(21ページ図版参照)にあります。Cの上の方にある、いわゆる美濃紙にあたるもの2枚、割に大きな字で書いてあるもの、これが岡本監輔の書いた草稿です。ですから左の後ろの方に「監輔草」と書いてあります。上の方と左の端の方に少し小さい文字で書いてあるもの、これが三島と重野の書き込みであります。この文書のままでは分かりにくいので書き起こしたものがプリント(写真)の下にあります。元々三島は朱筆で書いています。重野は墨書です。折角こっちへ来るんですから差し上げようと思って、全部カラーコピーをし

てきました。これは差し上げます。

何でこういうものを作るのかということ、日本の経験というものが今の清国の改革に役立つはずである、ということは、言い換えると、これはもう1898年のことですから、明治31年、つまり一世代30年のワンクール終わったところで、清国に役に立つものとして日本の経験を伝えようとしてるわけです。その限りでは、文章をいちいち読みませんけども、一応文字の添削ということが初め志されているようですが、同時にこのこと自体に対する意見を求めたのでしょうが、重野・三島のどちらもこれが良いと、高く評価する方向での意見を書いています。重野の方は事業そのものについて評価を最後に書いてありますが、三島の方は真ん中辺で、思想的に見てアジアがちゃんとこれから立ち上がるべし、儒学を中心に釈・老あわせて対抗するんだという自分たちの共通の精神というところを、ここに簡単に書いているんだと僕は見えています。いずれにしても真ん中辺よりうしろに「老聃釈迦モ亦タ皆古ノ博大真人」云々というのは、これは重野の文章なんですが、「均シク亜細亜ノ精神ト為ス」。「我ガ心ヲ獲タリ、圈ヲ加ヘザルヲ得ズ」ということで、この圈というのは朱でずっと振ってありまして、昔の人はいいところへ来ると圈を振りましたから、ここに力が入っているということで読んでの方が嬉しい。この場合の「圈ヲ加ヘザルヲ得ズ」というのは、三島の方がちょっと高ぶっているところだと思います。

善隣訳書館そのものは岡本が構想したものから出発しているんだが、その周辺の一格高い知識人、重野にしる三島にしる、バ

ックアップするというよりも自分たちも同じ考えでおるぞというということで、共同歩調をとっているという感じをうけるのがこの善隣訳書館だと思います。善隣義会での段階の文書は何種類も残っています、時系列的にはあるものがその次のものへという風に段々書き換えられていくということが非常にハッキリするという形で残っています。それが善隣協会というものに名前を変えた段階で公表された、「善隣協会主旨」というものが例の梁啓超の『清議報』の第2号に載っています。

どの程度岡本の作った善隣義会に関する文書と近いものであるかという点、この対照表から義会を協会に名前を変えたものであると分かっていたかと思いますが。まだこの段階、1899年の初めは善隣協会と言っていたものを、同年の秋に湖南は善隣訳書館と言ってるわけです。ですからこの間に訳書館に変わったのです。湖南が発刊するのが8月ですから、当然8月以前、恐らく1899年の前半に岡本韋庵を中心に吾妻兵治も協力して善隣訳書館は一旦出発している、そうでないと内藤の話が出てきませんから。

ところが内藤が天津で喋っているうちに、おそらく何か問題が起こって、99年の12月には今言いました4つの本、これは善隣訳書館として刊行されているんですけども、それには岡本は参加していません。というのは代表幹事の中に出てこないだけでなく、いま回したパンフレットのなかで明らかに岡本は外の人であるという筆致で書かれています。つまり『万国史記』を紹介するときに岡本監輔氏の云々という注をつけています。もっとはっきりするのは、善隣

訳書館の名前で公表せられた文書ということになると1900年の4月、ですからあの4つの本が出て彼らがその暮れに渡清します。吾妻兵治なんかは中村先生がつくられた『白岩龍平日記』の1月に本をもらって読んだとか4回出てきます。そんなこともあってですね、善隣訳書館は岡本抜きにできて、そして吾妻たちはそのために訪華をしている。その結果は彼らはこれでやれるんだということで、今さっき言ったパンフレットを1900年の前半に出している。ところが実際にはうまく行かなかった。

では一方、岡本の方はどうかというと、それなりに、時期がハッキリしないのですけども、この善隣訳書館とは別のナントカ館一館だけしか分からないのですが、創立構想を持ったらしい。持ったというそういう文書はあるんです。ところが年月がはっきりしないので、僕は1899年の秋のことであろうと踏んでいるだけなんです。そこへ出てくる人は、創業者として岡本が挙げるのは有井範平、これだけ前の序跋者の中に出てくる友人有井範ですね。あと、岡本は別ですが、大石・丹羽・秋永・大野・谷口・椿・草加・植松という人。私が調べる限りどこにも出てこない、徳島の友人なのかなという程度しか今は分かりません。ひょっとしたらもう少しちがうところで繋がりがあのかも知れませんが。

いずれにしてもこういう人を集めて本を出すんだということを決めてるだけでなく、実際に岡本はその後、清国に行って本を出すんです。刊行予定に、『万国通典』『列国史鑑』、一なんで『万国史記』がないのか、『列国史鑑』は『万国史記』の焼き直しなのか、その辺りはわかりません、『皇国文

芸伝』『国士美談』等を出すんだと言っています。

岡本は吾妻とは別にですね、1900年の暮れに訪華して、しかもかなり長く居ります。その間、そこにあげた少なくとも4つの本（『鉄鞭』『西学探源』『孝経頌義』『大日本中興先覚志』）を、どうも清国で出したようである。上の3つはハッキリと商務印書館が代印しているわけですから。しかも代金はどうして、150部もらって誰に50部渡してというように、比較的詳しく分かります。いずれも光緒27年4月、1901年の5月のころ、全く同じ時に出ています。最後の『大日本中興先覚志』だけは開導社ということになっておって、明治34年刊ということが封面の所には明記してあります、しかし著者名として「日本岡本監輔」と書いてあるんですから、少なくとも清国で売のための本であるということがわかります。ですから、これらのものは結局、吾妻たちとは別のルートになってしまっているけども、善隣訳書館を構想したもののもう一つの別の流れで、岡本は清国で実際に印刷出版を行った。これも今見る限りではさして利益を上げているとは見えません。実際、岡本は晩年たいそう貧乏したということはハッキリしている。ですから事業は成功しなかった。初めの『万国史記』が売れたような時期なら良かったのかも知れません。いずれにしても、当時の状況の下では海賊版が流行した時代ですから筆者にお金が入ったかどうかはわかりません。

いずれにしても、日清戦争の後には清国の側で日本の経験に学ぶということを本気で考えるという時代があった。それに対して日本の側でもそれを自分たちの経験を清

国の発展のために提供しようとする動きがあった。しかもそれが書物を通じて、その書物は当時の良くてできる人なら簡単だったんでしょうが、訳であるか作であるかは別にして、日本人の漢文による書物、そういうものを作ることによってこちらの知識を提供しようとした。

ですから、ここにはもう書きませんでしたが、岡本が善隣訳書館を構想していく上で、一岡本はある意味では天皇主義者ですから共和思想というものに反対なんですね。一、共和思想なんていうのは外して、と初めは書いています。段々それではまずいと思ったのか、日本のあまり良くない経験というのは、こちらが初めからセレクトして、と抽象的に書くようになっていきます。それは誰の意見であるかわかりませんが、初めあったものが、そういう経過をたどって変わっていくことが分かる。そういうことが1898年、戊戌から1900年の義和団の頃にかけて起こった。そして、その時期は実は日本のアジア主義団体がいろいろと清国で活躍する時期でもあった。ですから、三島の関わりについては岡本との関係を若干話をしたに過ぎませんけども、おそらくこの「善隣義会五規」というふうなものの添削に関わる、それぞれの自分たちの知識をそんなたちで交流する、そういう知識の輪がある中で、清国と日本の、ある意味ではその後の時代からすると考えられないような、簡単に言えば「良い関係」の時代がかつてあったのではないかと、というふうに言えると思うということで、この話を終わらせていただきます。

質疑応答

(町泉寿郎) 狭間先生、どうもありがとうございました。皆さん方、ご質問等ありましたらどうぞ、お願いいたします。

(久保田文次) たいへんおもしろい発表をありがとうございました。私も昔、軍国主義少年でしたから、探検家としての樺太千島先覚者として御尊敬申し上げていたんですが、こういう教育活動は先生からいただいた本から分かったんですが、中身の儒学等についてはよく分かりませんでした。本当に根が深いということがわかりまして、また当時の日本人の漢文が中国に行って通用するということがわかりまして、たいへんなことだったと思います。

『万国通典』の鳥尾得庵小弥太の次のは、長岡護美（ながおかもりよし）ではないでしょうか、熊本細川家の。

(狭間) ああそうですね。ぼくは護雅夫先生に引きずられてモリという姓ということから考えてしまいました。はいわかりました。どうもありがとうございました。

(中村義) この本にはあなたちゃんと書いてますよ。長岡護美って。

(狭間) 長岡護美は知ってたんですけど、この時には思いつかなかった。困ったなと思って誰か教えてくださるだろうと。どうもありがとうございました。とにかく、三島中洲をあれだけ研究しておられるのを見てびっくりして参りました。

(藤井昇三) 電気通信大学の藤井昇三でございます。たいへん興味深いお話ありがとうございました。

一つうかがいたいのは、岡本監輔についてうかがいたいのですが、私もよく分から

なかったんですが、図書館などで人名録で調べたところ、こういうものがありました。

『東亜先覚志士記伝』からの引用としてですね、「明治6年に陸軍省参謀局編纂課の嘱託として中国に渡っている。清国との合従を期した。しかし果たせなかった」という記述があったんですが本当でしょうか。『東亜先覚志士記伝』は、かなり基本的には史実には忠実なんですけど、時々編者のあれが入ったりして不正確がありますので、そういう事実はあったのでしょうか。

(狭間) 1873年でしたかね、あの時の清国行については日記が残ってますから、それは有馬先生が翻刻してくださっていますから、徳島大学の紀要にあります。僕はその記述はほぼ正しいと思います。恐らく参謀本部の金で行ったんだと思います。それで兵要地誌を作るのは任務であったと思いますから、割合に部落があれば家が何軒とか、そんなこともちゃんと日記に書いてありますけど、あれではどれほど役に立ったかなという程度のものだと思います。「清国との合従」云々というのは、それはあったのかも知れんけども日記等で見える限り、そんな空気はこっから先もない。実際廻っているのは山東省の一部であって、あんなところで合従や云々なんてしょうがないでしょう。ですからそのあたりになると、昭和の編纂物で出来るだけ話を大きくするということがあるかもしれない。しかしひょっとしたら、そういう任務を出来たらしてこいということがあったのかもしれませんが、そこは分かんんです。参謀本部の金は外務省の機密費とどう違うかと言うことに異論はあるかもしれんが、当時でしたら恐らくそういう金がなかったら外国に行けなかったで

しょうね、たいへんな物要りのはずですから。しかも暗い使命を帯びているというような感じは、全く日記から伺えませんものね。当時の人は平気だったのと違いますか。段々にややこしい時代になってきたのであって。

（藤井） どうもありがとうございました。

（狭間） 良くわかりませんが、ひょっとしたら参謀本部のことはもっと調べていったら、それぞれにちゃんとした任務というものがあったでしょう。何にもなしに金を渡すはずはないですからね。しかし任務をどの程度のものとして考えるかという、ギブアンドテイクの関係がめちゃくちゃ明確であるということとはなかったんじゃないかと思いますが。明治の初年からそんなことやれるはずがないという気がしますね、よくは分かりません。むしろ小林一美さんならもう少しその辺りを押えておられるかもしれないんですが、後の我々の理解からの整理をするのは、明治の初年にとってはまずいという気がしますね。

（久保田） 先程の、『万国史記』と『万国通典』に鳥尾小弥太得庵が出てきて、この人だけ軍人なんですよね。それで不思議に思っていて、いま藤井先生のおっしゃったことで思い出したんですが、その時は参謀本部は独立していなくて陸軍省参謀局なんです。鳥尾はその参謀局長なんです。鳥尾は山県有朋に嫌われて首になったんですけれども、そのきっかけは谷干城らと一緒に民選議院設立建白書というものを抑えるフランス学派なんです。ご承知のようにこの時は陸軍の主流は外征論者じゃないですよ、内政を固めるというもので。だから先生がおっしゃった気持で派遣したので

はないんでしょうか。つまり鳥尾自身がそういう考え（外征論）を持っていなかっただろうと思います。

（狭間） ありがとうございます。その点についていい加減にしか考えていませんでしたが、だいぶハッキリしました。

（中村） 背伸びした質問でも申しわけないが、二松学舎で私どもがやっているこの三島中洲研究会は山田方谷とか三島中洲とか、これはかなり思想史的なもので、朱子学、あるいは陽明学、『大学』、そういうことをかなりやっておりますが、そういう立場からの質問として、例えばこの岡本韋庵がつまり陽明学、あるいは『大学』、そういう儒学の古典をどんな風に読んだか、あるいは言及しているのか、何かありますか？

（狭間） いろいろ彼はその方面の本を書いています。僕が今受けてる印象では朱子学で押し切ろうという感じを受けますね、あまり信用してもらえとこまりますけど。明治の人というのは我々が考えるのに比べて、少なくとも天皇に対する感覚がものすごくある意味ではきついというか、岡本のように農民で生まれて明治の世でいろんな事で活躍できたら、明治の世というのはめちゃくちゃいい世であるというふうに思えたに違いない。そこで一番の問題は自由ですね。自由というのは要するに、今の勝手気儘とほぼイコールに考えて、実際そういうところがあったわけですから、彼は嫌い。それに対して、どうも彼らが考えるのは、言ってみたら東洋の倫理、やっぱり三綱五常なんです。それを抑圧の体系ではなく、本来的な親愛の関係なんだという風に読み替えて、これを抜きにして西洋に対抗できるかというところがあり

ますね。ですからその意味では朱子学的なものを基礎に、それこそ陽明学であんまり李卓吾の方まで行ってしまったらもっと厳しいことになりますから、というような感じで僕は見えています。ただし丁寧にトレースしてしっかり押えて発言しているわけではございません。

(町) 陳捷さんいかがですか。

(陳捷) 国文学研究資料館の陳捷と申します。私は、清国公使館の活動の資料を見ると時々、岡本監輔の名前が出て来るので、その方面から関心をずっと持っています。彼と中国との関わりについて、ずっと関心を持っていたんですが、いまいちはっきりイメージが湧かなかったんです。例えば、先生がさっきおっしゃった、中国に行く時、旅行の目的で行ったのでしょうか、実際、スパイ活動したかどうかは別として。例えば明治8年の時、山東に行った時は台湾問題のために、結局、充分旅行の目的は実現しなかった。多分この時代に中国に渡った日本人はまだそんなに多くないので、そこらへんから台湾との関係がいろいろ言われるんですけども、実際は単に旅行目的で行っているのか、どういう目的で行っているんでしょうか。

(狭間) それはおそらく、またお金の出所とも関係するんですが、この場合は台湾問題に違いないと思います。参謀局から出たお金で、しかるべく日本の国家的発展のために尖兵として行ったのだと思います。ただし当時なら、すぐ侵掠なんてことを考えている訳ではなく、そういうふう to 動いていると僕は見えています。後の目的は、自分たちの商売の計画で動いているように見えます。

(陳捷) 商売の話なんですけど、彼らは自分が出版する本を中国で出版する、いい本を選んで中国に紹介するという目的もあるんですが、商売としてのお金儲けという意識もあったんですね。

(狭間) そのつもりのようです。ですから例えば、書物を商務印書館から300部を受け取って自分でさばいている。商売しよばいな〜という感じで、あまり儲からなかったであろうという気がします。吾妻兵治たちは明らかに組織的に動こうとしているのに、しかしそれがまた全然うまいこと行かない。義和団で、どう云うか、日清関係ががらっと変わったというふうに見たほうが良さそうですね。それ以前に大体考えていたことが、みんなうまいこといかなかったという気がする。

(陳捷) どうもありがとうございました。

(竹下悦子) 竹下と申します。ちょっと教えていただきたいんですが、先ほど『万国史記』というのは世界史のようなものだとご説明いただいたんですが、事実としてどこから学んで、そこから書けたんだろうということなんですが。

(狭間) あのね、一つはね、日本でもいくら出てくる。たくさん本を参照にしたと書いてあります。もう一つ彼の知識源として大事なのは、レジメの1枚目の『万国通典』の三宅憲章という人。この人は岡本と同郷の人でフランス語が出来た、フランス留学していますから。フランス関係のものは三宅がいろいろ口述で教えている。福沢諭吉のものをはじめ、明治の初年にかなりのものが読めるようになっている。原典を友人に助けてもらってまとめ上げたのは、彼のこの手の本であるらしい。それが

正確に何がどれによっているかという系譜調べは、全く出来ていません。梁啓超に関わってここに行き着いたわけで、到底それ以上には手が及んでいません。

（竹下）そうすると例えば、三島中洲なんかは歴史を書いたり、あるいは歴史的視点を持つ時は中国の伝統的な經学的史観で見ると思うんですけども、今ご紹介いただいた『万国通典』『万国史記』、西洋的な歴史観で書かれているということでしょうか。

（狭間）そこまでは言えないでしょうね。『万国史記』のトップは日本の天皇です。日本が一番。あきらかに日本人用に書かれているんです。その次、アジアです。清国あたりの所から面白い。天皇の所はおもしろくない。ただし、向こうで出た海賊版もそうになっています。日本の歴史はこんなものと思っていたのかも知れません。そういう意味では決して全く新しいというわけにはいきません。しかし、それにもかかわらず世界のことを全部並べて書いてくれている、という点で新しかった。

韋庵がその当時どれほど新しい西洋的な知識を持っていたか分かりませんが、少なくともちょっと後のことになるけども、重野の『大日本維新史』、明治31年の版で、序がその直前で、本文はもうちょっと前に書かれていると思いますが、憲法発布の前までです。これなんかは、明らかに新しい歴史スタイルであると僕は言っているように思いますね。韋庵のものよりも十数年のちになりますけども。

『万国史記』なんかは感じとして、それ以前の歴史とは違うという意味での新しさ。その新しさは先ず第一に世界を全部書いてある。フランス革命なんて詳しいですよ、

フランスは全二十巻のうち三巻ですからね。やっぱり明治初年の人はフランスが好きだったんですね。アメリカなんかでも、コロンブスの大陸発見の前の辺りから書いて、コロンブスがこうなって、このあと独立云々とちゃんと書いてある。日本のは天皇のことだけ書いてあるのと大違い。その意味で新しい。さりとて、その新しいものを入れて自分で作ろうと言ってるんだけど、自分として新しい世界史を構想してるかという、そこまではいかんでしょう。日本歴史学の創設者に数えられる重野になると『維新史』では明らかに新しい叙述スタイルだと、読んでてそういう気がします。ですから明治初年というのは、そういう変化の時期である。ちょうど、二松学舎の出来た頃、ここは明治10年10月10日創立でしょ。

（竹下）この質問をしたのは実は中国の文学史が、例えば魯迅だとか魯迅の次の世代に中国の文学史が語られる時に、そのベースになってるのが那珂通世を初めとする日本の文人の書いた漢文学史だったと思うんですね。それは中国の学術の新しい学術の基礎に日本の歴史的な文学に対する見方があったという感じがするんですけども、それと同じようなことを意識して『万国史記』等が出来てきたわけではないんでしょうか。

（狭間）おそらくその視点は、問題なしに言われる通りだと思います。しかし、もう一つ考えんといかんのは、そんなその魯迅と那珂通世を結びつけるだけではなくて、『支那文学史』を最初に書いたのは藤田豊八、斎藤希史君が『漢文脈の近代』で書いてるでしょ。要するに東アジア圏で支那を相対的にみる、そこで初めて支那文学史が

出来上がる、この関係を押さえないと。那珂が魯迅につながるということもあるのでしょうが。

（竹下）いえ、魯迅が、ということではなくて、中国ではそれまでは文学史という考えというか、視点はなかったと思うんです。

（狭間）それは、斎藤君が言いたいことで、文学というのは我々が言うリタレチャーに訳すというのと、もともとの中国のいわゆる学問としての文学が、どうして今の文学に変わるということが、ちょうど、文学史の成立に並行してくるわけです。そのあたりは専門外なので、ぜひ斎藤君のをとお読みになってください。僕は付け加える事はないんですが。

（陳捷）私は多分、万国の歴史の史観よりは世界の知識を知りたい、だから、歴史の書き方よりはその中に書かれた知識の方がみんな興味があったと思います。

中国で『万国史記』がどういうふうに受けたかというところで、一つ参考出来るものがあります。『万国史記』の序文を書いた岡千仞は、実は明治13年くらいに『仏蘭西史』を出してるんですね。出版するときには清国公使館の人と記念パーティーというか、一緒に酒を飲んで、そのときは実は『万国史記』の話が出ていて、『万国史記』は中国ですごく売れていて、でもあれは人のものから写したものばかりで、あなたの本が先に出たら多分あの本よりは売れたのではないか。是非、中国で出版しなさいと提案してるんですね。岡千仞自身もすごく自慢して、「実はこの本を通訳するために髪の毛が白くなった。だからあの岡本監輔の本とは比べものにならない。」という自慢の話があります。だから、歴史観というよりは

知識の話のほうが重要だなと思うんです。

（狭間）おっしゃる通りだと思います。梁啓超は19歳、1890年の頃になってようやく世界に五大州があることを知ってびっくりしてます。1890年ですよ。

（佐藤一樹）二松学舎の佐藤と申します。非常におもしろいのは、序文は明治初期の一流の漢文学者達を書いてますけども、その岡本自身はこの年譜を見ますと、15歳の時から漢学の先生に就いているようですが、このころは旧藩校なんかで教えた漢学者がいっぱいいて、そういう人たちがいる中で、岡本は短いとはいえ第一高等中学で教える機会を持ったり、斯文会の創設にも参加してますよね。漢学者の経歴としてはさほどではない、というか寧ろ知られていない。それはこういった人達とつきあい、割合いいポストを得て彼自身も漢文を書き続けているんですが、これは彼の個人的才能なのか、或いは個人的な関係でこういう経歴になったのかということは、何かご承知でしょうか。

（狭間）これは非常に難しい質問ですね。この関係はよく分かりません。もちろん僕はこれだけの文章を書けるのは相当の才能だと思いますね。しかも三島中洲なんかと比べると条件は悪いわけですから、そういうなかでがんばっているのは大したものです。同時に、それしかまたはい上がるすべはなかったわけで、そういう意味では努力したんでしょうね。

（佐藤）当時の重野だの、川田だの、三島中洲だの、みんな師弟関係を持って、それぞれの派閥みたいなものがありますよね。彼はどこにも属していませんから。

（狭間）徳島での、誰かについたという経

歴などは、中央から見たら全く問題にならない。その意味では、とにかく単に勉強するだけはいかんということが樺太探検に彼を突き動かし、それでかなりの地位を得たんでしょ。そこでいろんなつながりが出来たであろう。しかし、どう考えても今の我々ではちょっと考えにくいような、2年おきくらいの転職しているんですね。しかも転職する間が切れてるんですね。切れながら転職ですから、我々の若い時代よりもっと悪い。

(町) 先生の今のお話と絡むんですが、『続対支回顧録』に出てくる岡本監輔のことで、江戸に最初に出てきたのが文久元年、23歳の時で、幕府の儒官の杉原晋斎の食客になってとありますが、年譜の所にはその話は出て参りませんでしたが、昌平黌の儒官のところで世話になってというと、そうすると色々細かく考えないといけませんけども、重野なり三島なり川田なりというのは皆江戸の幕末の昌平黌に居る人達ですので、その時代すでに交流があったりするのかなと思ったりするんですけど、いかがでしょうか。

(狭間) 僕は全くそのあたりのことは分かりません。発見されたら教えてください。

恐らくまだそのレベルではなさそうな気がします。もっと下の方で、樺太探検云々ということで動きまわった後でもう一段上がったところ、しかし上がっても三島や重野に比べたらまだ一段下のあたりでウロウロしているという感じだと思います。

(町) 分かりました。ありがとうございます。

予定の時間になりましたので、皆さんこの辺でよろしゅうございますでしょうか。狭間先生、本日はどうもありがとうございました。(拍手)

(狭間) こちらこそ教えていただいてありがとうございました。

(2005.07.30 第13回)

(原稿起こし：川邊)

(文責：町)

萬國通典序

國之有制度猶人之有身體而國之有治亂猶人之有得喪人之得喪必因身體之修否而國之治亂必因制度之完否是故審其制度而後其

治亂可論已漢土二十一代紀傳以叙治亂書志以述制度二者不偏遺蓋為此也然其書浩繁自非儒生學士不能熟讀而詳記是以司馬氏通鑑紀治亂之略馬氏通考

舉制度之要並行以資君相政治者既久矣方今四海蕩國交通為君相者不可不察各國制度以鑑其治亂於是略記萬國治亂者陸續上梓而未聞有及其制度者乃者

友人岡本君監輔編萬國通典徵余序其書該而不煩簡而不遺各國制度瞭然于一目之下此而與彼略史並行如通考之於通鑑君相因以知治亂所原由鎔綜會融取捨

得宜則其資益政治不淺少矣雖然制度之本在君相君相譬人心也人心不明身體何由運用君相不賢制度何由施行故曰徒法不能以自行又曰有治人無治法君相讀此

編者可不先自省哉是為序

甲申月 中洲學人三島毅撰



八洲居士白田山美書



善隣義會五規

一 吾黨結社之意在合我同文諸國人有志於斯民者與
辨天人之道博修五洲之學無得無外一辭平交布存
固我相親相愛以長智德以圖公益以固吾國相保心
誠以不問舟車之費蓋欲俾同文諸國人民均開
化之域以永保天祿於亞細亞洲內不得不從事於此
凡欲入此會者各捐多金以爲行善之資若其有志
人不拘何種皆可列于會其保管資金者必撰其人
至於使用方法則社員投票以決其可否如設學校營
聖廟設賢士招飛工及免元日報編纂諸書新理一切

若其句物作
其人二字
若其二字
皆下傳人
字

公益等項議既決以從事則不復較其小利害蓋本
爲義舉故不得以小害在大功

應上補改一
字

學者不可無
此天空海闊
之量

包括教義皆
在我黨內
論更其深大
先獲其心
公決不待不

凡入此會者欲其道德純粹爲內外人模範虛心遜志
固其所宜不得自尊自大輕蔑外人蓋斯橫目之族而
有頑陋難論者美非吾黨分內之事則當諒心諒抱以
庶幾其進開明之域況於亞細亞洲諸國同文同種之民
乎又不得輕侮聖賢之言攻擊異端之說蓋孔子之道
即天地之道至正至公至精至純實爲最上至極宇宙
第一之訓典吾黨遵奉不怠所以聯天心合人職而老
職釋地亦皆古之博天真人均爲亞細亞之精神而其
公決不待不

言之不同畢竟因俗立教之故吾僑後生當以意逆志
爲其進法之妙以救斯民於迷途也故入此會者毋論
浮屠者流皆心一辭平交唯在磨煉智德以成教于國
一 每月會議一次以第二日曜日爲之始于午後一時終
於八時置一爵一肉饗茶與煙草從各人所欲

一 必有會長估且不定其人假撰一名總攝庶務其諸員
日率佳取其充衣食俟有功效乃論增俸

善隣義會
之幸福也但事
以俾眾能
其事未行
中正
中洲三島教義

監輔草

安得委評